

学校教育目標	自ら伸びる 「問い直し」を大切にして、教育活動に山場を創り、「生きた言葉」で自覚化して、他者と関わり協力して乗り越えていく	経営理念 ミッション ビジョン	「学校は子どもが育つ土壌である」（自ら伸びる意思の形成をなす土壌） 【使 命】地域と共に児童も大人も共に成長していく機会・場を創造する学校 【経営展望】「教師こそ最大の教育環境」を自覚し、日々の業務の充実と研鑽に励む
--------	--	--------------------------------	--

ビジョン（中期経営目標） 実現に向けての現状（進捗状況）と今年度の位置付け	昨年度は、「自ら伸びる」を本校の方向目標として新たに定め、スタート。自己認識力の向上のためには、「自ら伸びた」と実感できる場が必要と考え、コロナ禍で一昨年度は中止した各種行事を感染拡大防止に配慮しながら、分散したり ICT 機器を活用したりしながら開催した。しかし、1 学期は、行事を通しての山場が児童に意識されなかった。例えば、運動会に関しては、一堂に会しての開催は中止したものの各学年が取り組んできた演技を動画視聴という形で保護者へ発信したが、児童の認識としては「運動会は無かった」であった。そこで、2 学期以降は、山場のある教育活動を意識し、成長の実感を振り返らせる取組を重ねた結果、児童が主体となる取組は自己認識力の向上につながる事が明らかとなった。 今年度は、昨年度の成果を足場としながら、教師が準備した山場を児童に登らせるのではなく、児童自身が山場を意識しながら「自ら伸びる意思」を育てていけるような教育活動を創造していく。こうした教育活動の核は、次の 2 点。 ① 『「生きた言葉」に出会い、「生きた言葉」を深め、「生きた言葉」で分かり合う』学びのプロセスを「学びの型」と捉えなおした「問い直しのサイクル」を意識した授業づくりや行事づくり ② 「生きた言葉」で暮らし（学級）を問い直す「はちの子の心得」を軸にした学級経営 これら①②を核として、問い直し、更新していくことが、今年度の大きな方向性である。 そのために、学校経営の柱を「問い直しのサイクルを（学びの型）を意識した授業づくり（教師の授業力）」「生きた言葉が生まれる学級経営（学級経営力）」「自己認識を問い直す行事づくり（自己認識力）」「子どもや大人の集いが充実する環境づくり（地域との協働）」の 4 つとし、自らの目指す学校像・児童像を追求していく。
--	---

学校経営の柱に係る考え方

a 「問い直し」のサイクルを意識した授業づくり (教師の授業力)	児童自身が山場を意識しながら「自ら伸びる意思」を育てていく授業づくりへ転換を図っていくために、「問い直し」のサイクル(学びの型)を意識した授業を展開していく。これらの学びによる児童の育ちは、「語彙力」「表現力」を指標とする。
b 「生きた言葉」が生まれる学級経営 (学級経営力)	児童自身が山場を意識しながら「自ら伸びる意思」を育てていく学級づくりへ転換を図っていくために、「じまんのはいく」で暮らしの出来事を見つめ、「はちの子の心得」で暮らしを問い直しながら、互いに成長していく集団を創っていく。
c 自己認識を問い直す行事づくり (児童自治)	児童自身が山場を意識しながら「自ら伸びる意思」を育てていく行事づくりへ転換を図っていくために、各種行事において児童自身が課題を自覚し、それを一つ一つ超えていきながら、「自分はどう伸びたい」という意思を形成していく。
d 児童や大人の集いが充実する環境づくり (地域との協働)	児童自身が山場を意識しながら「自ら伸びる意思」を育てていく環境をつくっていくために、コミュニティ・スクール活動を充実させ、地域の方が教育活動に参画しながら児童との関わりを深めていく。

評価計画（中期経営目標を設定して1年目）

A 中期 (3年間) 経営目標	B 短期(今年度) 経営目標	C 目標達成のための方策	主な成熟度		現状	D 評価指標	目標値 (%)	E 評価結果			
								10月		2月	
								達成値	評価	達成値	評価
a 「問い直しのサイクルを意識した授業を構築する研究推進」のサイクルを構築	児童が自分の言葉の在り方について「問い直し」のきっかけ	・読書量が増える活動を推進する。(図書祭り・ビブリオバトル・読書検定等) ・語彙力向上に特化した帯タイムを構築する。	4段階	自分の考えに確信をもったり、自分の考えの修正を迫られたりする。		・1ヶ月の読書冊数3冊以上の児童	90%	95.7%	A		
			3段階	本から得た思いや考えを他者へ問いかけ、照らす。							
			2段階	本の中から自分の好きな言葉や生き方につながる言葉を探す。							
			1段階	決められた時間に本を読む。	○						
		・年6回の公開授業や示範授業による相互参観を通し、「問い直し」のある授業づくりに取り組む。	4段階	児童自身が学ぶことに自信をもったり考えの修正を求められたりしながら、新たな問いに出会う授業。(問い直しのきっかけのある授業)		・学力調査の全国平均3ポイント以上の児童 ・「学校楽しいーと」学習意欲8割以上	80%	—			
			3段階	児童の意欲を喚起する教材で授業に驚きをもたせ、児童相互が問いを深めている授業。(教師の思いがある授業)	○						
			2段階	教師の発問によって児童が答えを探し出している授業。(教科書に沿った授業)							
			1段階	本時のめあてが教師により提示されている授業。(中央小スタンダード)							
b 学「生きた言葉」が生まれる学級を構築する	経営暮らしを問を熟議するを意図的に設けた学級。	・「はちの子の心得」を基に、2ヶ月ごとに暮らしを問い直す。	4段階	「はちの子の心得」を基にした取組により学級への所属意識が高まり、自己の成長が実感できる。		・「はちの子の心得」における振り返りの肯定的な記述	80%	94.2%	A		
			3段階	「はちの子の心得」を基に、めざす姿を自覚し、振り返りを重ねている。	○						
			2段階	「はちの子の心得」の問いを基に、めざす姿を学級で話し合っている。							
			1段階	「はちの子の心得」を意識していない。							
		・月1回「じまんのはいく」に取り組み、自然や人・暮らしの出来事(事実)に目を向ける機会を創る。	4段階	俳句の発表を通して、価値観を共有し、自分の考えや価値観を問い直している。		・「学校楽しいーと」学級集団における適応感8割以上	80%	83.7%			
			3段階	俳句の創作過程で「生きた言葉」を吟味し選ぶ活動を通して言葉の面白さを感じている。	○						
			2段階	「じまんのはいく」で「生きた言葉」を自覚し、事実に向を向けている。							
			1段階	「じまんのはいく」で五七五のリズムに言葉を合わせている。							
c 事自己認識を問い直す行	児童自身を味わう場を乗り越え	・成長の喜びを実感する学校行事を創造する。 ・中学校の自治活動につながる児童会行事を創造する。 ・児童主導で「お昼meet」を運営する。	4段階	自分たちで企画運営し、伸びたい姿を自覚しながら、次の行事へつなげることができる。		・「学校楽しいーと」自己肯定感の結果を言葉で自己評価できる児童 〔1結果の捉え 2分析 3どう伸びたいか記述〕	85%	自己肯定感72% 自分の伸びを文章で記述83% 平均値78%	B		
			3段階	自分たちで出したアイデア実現に向け、他者と協力し、自分の良さ等が自覚できる。 第5学年・第6学年	○						
			2段階	各種行事にまじめに参加し、自分の良さ等について考えることができる。 第1学年～第4学年	○						
			1段階	教師が声をかけないと動かず、自分の良さ等が分からない。							
d 環境づくりが充実するの	をコルミ活動の充実ス	・学校だより等で地域へ学校の姿を発信する。 ・コミュニティ・スクール活動を中学校区で交流し、取組を共有する。	4段階	より良いアイデアを創造しながら、児童が育つ環境づくりに参画している。		・教育活動の満足度(保護者アンケート)	85%	93.2%	A		
			3段階	各種たより等を見て、サポーター活動の申し出がある。	○						
			2段階	各種たより・HPが更新され、情報発信を積極的に行う。							
			1段階	各種たより・HPが更新されない。							

評価基準…A：目標達成（95％～100％）B：おおむね達成（80％～94％）C：もう少し（60％～79％）D：できていない（59％以下）
目標値を100％として、達成率を計算する。「例　目標値85％→アンケート結果92％　→目標値を超えているので評価はA

F　結果の分析・解釈（中間　10月）			
a ○1ヶ月の読書冊数3冊以上の児童が95.7%達成できている。 →学級単位で図書室を利用する機会を確保し、朝読書の時間に読む本がない環境を作ること、また、並行読書の推進として町立図書館や学校図書館からの一斉貸し出しの利用も進んでおり、不読率の減少につながっていると考えられる。 ○語彙力向上に特化した帯タイムは全ての学年で実施しできている。 →5月の部会から毎回語彙力向上を目指した取組を紹介し合い、各学年で取り入れやすいものから実施してきたことや、1学期の各学年の取組を夏季休業中に全体交流し、他学年の取組の良いところを取り入れたり、刺激を受けて新たな取組を考えたりして2学期の帯タイムの準備を夏季休業中に行ったことが語彙力向上に特化した帯タイムの構築につながったと考える。 ○『学校楽しいーと』学習意欲8割以上」80.7% →公開授業や示範授業において、「問い直し」のある授業づくりに取り組み、児童の意欲を喚起し児童相互が問いを深めることのできる授業を目指した日々の実践が、児童の学習意欲向上につながったと考える。また、「問い直し」のサイクルを取り入れた日々の実践の中で、児童相互が「生きた言葉」に出会い、自分自身の学びを問い直したり深めたりすることができ、自己の成長を自覚できてきていることが学習意欲につながっていると考える。	b ○「はちの子の心得」における振り返りの肯定的な記述は94.2%である。 →児童は、学級での目標を設定し、それに向かって取り組むという素地はできている。しかし、教師が、児童の取組をいかに肯定的に評価するか、どんな姿からその伸びを見取るかについての研修が必要であったため、夏季研修を通して、学校職員の共通認識をもつようにした。 ○『学校楽しいーと』学級集団における適応感8割以上」83.7% →月1回の「じまんのはいく」の取組において、季語から想像したことや空想の世界を俳句にするのではなく、事実や実体験に伴った「生きと言葉」を俳句にすることにより、自分の考えや思いを自分の言葉で表現することができるようになってきていることが児童の自信につながっていると考える。また、考えた俳句について担任とやり取りをする中で、新たな言葉と出会ったり、思いを共有したりすることで人間関係を構築し、さらに出来た俳句をクラスの友達と紹介し合うことで互いのよさや違いを受け入れることができるようになり、学級全体の所属意識や向上意識が高まったことが、学級集団における適応感の向上につながったと考える。	c ○『学校楽しいーと』自己肯定感の全校平均値72%である。 　自分がどう伸びたいかが文章で書ける児童は83%である。 　以上、2つの平均値が78%である。 →目標値の85%に達することができなかった。 ○「自己認識を問い直す行事の創造」に向けた各学年の成熟度は、4段階のうち3段階は5学年と6学年、他学年は2段階であり、達成度58%である。5・6学年が3段階まで達成できたのは、各行事において実行委員を募り、児童の主体的な活動になるよう支援した成果である。 　また、お昼の「はちの子meet」については、「失敗も経験」ととらえ、児童主体の活動を継続している。その結果、自分の考えを原稿なしで話す機会が増え、11月4日実施の避難訓練でも自分たちの行動を振り返る発表をすることができた。 　『学校楽しいーと』での自己肯定感のとらえ方は児童により様々である。本校では自分の長所も短所も含めて自分を認識することを目指している。自己肯定感のとらえ方が硬直しているのではないかと分析している。 　それに対して、自分を認識し、どう伸びたいかを記述できるという力がついたのは、全教科・領域で言葉を大切にして「書く」ことを積み重ね、適切な時期をとらえて振り返りを行った結果だと考える。 　最後に、「行事の創造」については各学年の方策や評価について共通認識が成熟していないためと思われる。	d ○保護者アンケート「府中中央小学校の教育方針や教育活動には満足している」に係る肯定的回答は93.2%。 →児童が成長の喜びを実感する学校行事の取組をはじめ、分散参観、学校便り等で教育活動をより分かりやすく広く知らせている。また、本校の示すビジョンを教職員が日々の授業の中で意識し、改善を図っている結果、肯定的評価につながったと考えられる。 ○保護者アンケート「コミュニティ・スクールの一員として、教育活動に参加し子どもと共に学び合おうと考えている」に係る肯定的回答は73.9%。 →CSの取組においても学校教育方針を共有する場を設け、定期的活動は、昨年度に比べ1回あたりの参加者が1.5倍増加。1学期のCS活動に参加した保護者総数は413名で長子の7割に該当。町内の小学生をもつ母親のフルタイム就業率は約3割（パートタイム約4割）を踏まえ、日中活動に参加できる保護者のほとんどが参加している。アンケートの73.9%の解釈としては、授業に関わるサポート活動限定として捉えたり、設問の「学び合おうと」の言葉から具体的なイメージがわきにくかったりしたのではないかと考える。

G　改善方策案			
a ○引き続き、図書館や図書室、はちの子文庫の利用を進め、並行読書を行うなど学習内容に関連させながら、児童が本に親しみやすい環境づくりに取り組む。また、本の中から自分の好きな言葉や生き方につながる言葉を探せる活動にレベルアップできるよう、帯タイムに本の紹介や読んだ本のまとめをするなど、学年の児童の実態に合わせて取組を行う。 ○冬季休業中に2学期の帯タイムの取組を交流し合い、語彙力向上に向けて、各学年のまとめとしての3学期の取組を考える機会とする。また、年度末には今年度の各学年の研究を報告する会を開き、発表内容の一つとして帯タイムの実施内容とその成果と課題を分析する。これらの活動全体を振り返り、来年度の取組を考える一助とする。 ○三校合同研究会や示範授業などにおいて、「問い直し」のサイクルを意識した授業づくりを行い、実践・相互参観することで、教師一人一人も児童と共に学び、児童と共に自ら伸びる機会とする。また、年度末に、今年度の研究についての振り返りを行い、研究の成果と教師自身の成長を自覚できるようにすることで、さらに児童の学習意欲を高める授業づくりの研究が深まるようにする。	b ○学年主任を中心とした、学年経営に基づく「はちの子の心得の取組」を学級ごとに話し合うことで、学校全体での共通意識をもった取組にしていく。また、学校行事を大きな山場と設定しながら、はちの子の心得をもとにした問い直しの場を設定し、児童が一年間を連続して伸びを見つめられるよう取り組んでいく。 ○「じまんのはいく」の取組のために俳句を書かせるのではなく、行事や日々の感動を伴う出来事的機會捉えて俳句を書かせる活動を行うことで、まさに今生まれた「生きた言葉」を表現し、吟味できるようにする。また、俳句を書いて感じたことや、友達の俳句を読んで感じたり考えたりしたことを交流し合うことで学びを共有し、信頼関係を構築していく。これらにより、互いに認め合える学級づくりを行う。	c ○今後予定している「大縄交流会」「はちの子デー」「はちの子祭り」など児童が主体となって活動する行事に向けて、各学年が「山場」を意識した取組になるように学年会、分掌部会を充実させる。 ○また、各学年の目標達成のための方策や評価の方法を見直し、いつ、どんな振り返りをするのかを生徒指導部・健康安全部合同部会を設け、明確にする。 ○自分の長所も短所も認識し、どう伸びたいかを書くことは、今後も継続して取り組む。 ○お昼の「はちの子meet」を継続し、3学期には次期執行部とのスムーズな接続を図る。	d 　教育活動においては、一定の成果をあげているので、児童や保護者に日常活動と結びつく肯定的評価を具体的にフィードバックする。また、各分掌部の現状分析や過去の取組のなどの振り返りを行い、問題意識や危機感、重点的な課題を教職員で共有し、知恵を結集し、改善を図る。そのために、教職員が気軽に意見が交換でき、建設的に創造を高め合うことのできる熟議の場を設ける。 　CSにおいては、安心して、参加できる環境づくり(児童の伸びようとする姿や成長を見守っていける環境)と共に参加者に学びの認識ができるような言葉がけをしていく。また、サポーター協議会の充実と共に、サポーター協議会の開催等で学校だけが教育を担うのではなく、「地域の教育力向上に携わっている」という当事者意識をもってもらえるように意識改革をしていく。学校としても「社会に開かれた教育課程」や「地域とともにある学校」づくりを全教職員周知のもと、推進を図り、協力体制を整えていく。(CSミニ研修を開催)
学校の大きな方向性に照らして： 教師が準備した山場を児童に登らせるのではなく、児童自身が山場を意識しながら自ら伸びたと実感できる教育活動を創造していく。 ・「問い直し」のサイクルを意識した授業により教師も児童と共に自ら伸びる機会を生み出していく。 ・児童が書いたもので学級経営の様子を問い直す。 ・実行委員方式を取り入れ、児童が行事をつくる主体へと高めていく。 ・サポーター協議会や職員研修を通して、学校・保護者・地域の各役割を自覚し、「共に学校をつくる」意識を共有する場を創造していく。			